

萩原明太郎は、1886(明治19)年11月1日、現在の前橋市千代田町で医師の長男として生まれた。弟がひとり、妹が4人いる。

父の密蔵は大坂で代々続く開業医の三男で、東京大学で医学を修めたあと、群馬県立病院をへて、前橋市で医院を開業していた。

明太郎は跡継ぎとして大切に育てられた。幼いころから病弱で読書を好み、中学時代から短歌を作るようになった。マンドリンに凝り、音楽家を目指したこともある。

一方で学業はおろそかになり、中学と高等学校では落第を繰り返した。上京して慶応義塾大学予科に進んだがすぐ退学、その後、25歳で京都大学を受験したが不合格となった。医院を継ぐことはもちろん、周囲が期待した学歴を得ることができないまま前橋に帰り、以後、文学に専心する。

北原白秋の主宰誌『朱鷺』に詩を発表し、中央詩壇に登場したのは26歳のときである。その

この父ありて

梯久美子

翌年の日記にこうある。

「自分のやうな人間にとつても幸福な途は気遣ひになることであらう。夢の中に生活するといふ一事であらう」(1914年2月3日)

明太郎は現実の社会に背を向け、詩の中に生きようとしたが、それは生家の財力があって初めて可能なことだった。

◎ ◎

30歳で第1詩集『月に吠える』を刊行し大きな反響を呼ぶが、

作家 萩原 葉子 ②



東京都世田谷区の家。前列左が明太郎、後列左が葉子。水と緑と詩のまち前橋文学館提供

壮絶な葛藤の系譜に連なって

であまり気は進まないなら、とにかく極めることにしました」と書いています。

写真を見ると種子は美しい女性だが、明太郎の審美眼は人一倍厳しかった。4の妹が揃って美貌だったからだ。明太郎と妹たちは仲良かった。2番目の妹ユキ(幸子)と寄り添って写った写真が残っているが、まるで恋人同士のような。この妹に独身時代の明太郎は長い手紙を書き、詩も添えている。そして、特に可愛がった末の妹・アイ(愛子)とは、のちに同居することになる。

20年に葉子が、22年に明子が生まれ、25年によやく明太郎は親の家を離れて家族入りせずの生活を始める。東京と鎌倉の計3カ所ですれぞれ短期間暮らし、宇野千代と尾崎士郎のいる東京郊外の馬込村に腰を落ち着けた。そこで明太郎が夫婦間に刺激をもたらすために種子にダンスを勧め、その結果、夫婦関係が破綻したことは、前記したとおりである。

破綻後の明太郎は、葉子と明子をつれて前橋に戻った。29年7月のことである。前橋の萩原家で父娘3人の生活が始まったわけではなく、当然のように母のケイと妹のアイも同居した。33年に明太郎は現在の世田谷区代田に家を建てる。のちに作家となった葉子の代表作『霧の家の家』はこの家での日々を綴った小説だ。

父にとつてそれは無価値なことだった。しかもこの詩集は、発行後もなく風俗系刊を理由に発売禁止の内達を受け、問題とされた2篇を削除している。医者にもなれず、正業に就くこともないまま30代になった長男に、せめて身を固めさせよう、と、父は見合い話を進めた。相併し醜といふほどでもないの

19年に結婚した明太郎と種子は、前橋の家で両親、妹とともに暮らした。明太郎の母・ケイは敵しい人で、種子につきく当たったが、明太郎が妻をかばってやることはなかった。

家には明太郎の妹たちが常に入りし、母のケイと一緒に種子の悪口を言った。葉子と明子は身を縮めるようにして暮らすことになる。

それでも、明太郎は小学3年生だった葉子に、寝る前に不思議の国のアリスを語り聞かせたり、ワルツだよと言

って、手を取って踊りを教えてくれたりするともあった。だが、前橋に移ってわずか4か月後、明太郎は単身上京し、現在の港区赤坂にあったアパート・乃木坂俱樂部に滞在する。父・密蔵の病気でいったん帰郷するが、翌年、密蔵が亡くなる。また子供たちを置いて上京した。このときは末の妹・アイと一緒に、現在の新宿区市谷で2人で暮らしている。